

とおっしゃる方がおられます。たぶん、その方が実際に着物の仕事に就かれたら、何もできない自分に愕然とされることでしょう。

求人希望で、和想館を訪ねてくださる方は結構多いのですが、なかなか続く方は少ないですね。「がんばります」といった舌の根が乾かないうちに離れていってしまう人たち。

そんな人たちの後姿を見ながら「結局この人たちは、一生自分の天職にめぐり合えずに回り続けるのだろうか。」と、とても残念に思います。

わたし自身、着物の仕事に望んで入ったわけではありませんでした。私は大学を出てから弁護士になりたくて司法試験を受け続けたのですが、結局夢かなわず。やむなく就いた仕事に着物屋だったのです。大学卒業後10年間無職の男を雇ってくれるのは、京都の北の端の丹後地方の小さな着物屋しかなかったのです。

都会で弁護士事務所を構え、人から先生と尊敬されることが夢だったのに、田舎で毎日着物を売り歩く現実。当然、私の心は「こんな仕事いやだー！」と悲鳴をあげていました。プライドがずたずたになりました。

毎日わたしは自分自身に言い聞かせました。「苦あれば楽あり。石の上にも三年。とにかく3年間はこの仕事を辞めることはならない。何があっても3年は続ける!!」毎日やらなければいけないことを書き出し、目の前のことに集中し、一日一日を過ごしました。

3年たったときには、着物の仕事が楽しく、また店長になり人を指導する立場になっていました。今は着物の販売を通じ和の心を世界に広めることがわが天職と確信し、感謝とともに着物の売り場に立たせていただいております。

「嵐に出会ったらどうしますか？」という禅問答があるそうです。あなたならどうしますか？

答えは「嵐の中心に向かって突き進め」とのこと。嵐の中心は台風の目といわれるように無風で快晴の快適な空間。つまり苦難の向こうには、この上ない喜びがあるという例え話です。

他人の芝生が青いとうらやむよりも、自分の目の前の鋳脈をもっと深く掘り進めば、大きな喜びの人生がまっているのではないのでしょうか。

そのためにはもう少しの辛抱が必要ですよね。



## ENJOY!着物コーナー

### 藍染めうんちく講座

夏の真っ青な空の下で、白い日傘と藍染の紺地の着物でお出かけ…なんて、最高に爽やかだと思いませんか?? そこで藍染について、今回は少しお話ししましょう。

#### (製造工程)

まず、3月つばめの訪れるころ苗床に種まきを始め夏前に刈り取ります。刈り取った藍を炎天下の中葉と茎に分けます。分けとった葉を今度は秋から年末にかけて発酵させる作業が始まります。例えて言うならお相撲の土俵のような部屋に藍の葉を寝かせ、勘だけを頼りに定期的に水をまき、温度の低い日にはごぞをかけるなどして、まるで小さいわが子のように手をかけ発酵させていきます。これが藍の染料となる「すくも」作り。

藍染めの職人は、この「すくも」を仕入れて、藍の染料を作ります。これは単に「すくも」を水に溶かせばよいというもの

ではない。藍の葉はとても食いしん坊でデリケート。「すくも」に石灰と清酒をブレンドして、染料を作っていきます。「藍建て」と呼ばれています。朝に晩に、藍がお酒や石灰を欲しがっているかを確認し、かきまぜながら染料作りが進んでいきます。

藍建てが終わるといよいよ染め。染料につけると、一瞬緑色に染まりますが、空気にあてるとあざやかなブルーに変色していきます。何度もこの作業を繰り返し、好みの青さに染めていきます。

#### (効果)

①藍染の歴史は日本だけではありません。ジーンズも、もとは藍染でした。

藍染めがジーンズや、野良着として愛用されたのは、虫をよせつけない、防虫効果があるからだそうです。荒野で眠るとき、藍染のジーンズは、虫やガラガラ蛇から身を守る役目をしたそうです。日本で野良着として使われたのも、虫除け作用があるからでした。

②藍染は武士の道着としても使われました。なぜか??

藍染には生地を強くする効果があるから。藍染を施して生地を強くし、刀で切れにくくしたのです。もう一つ藍染には抗菌効果もありますから、万が一刀で切られて傷ができて、傷口が膿まないように藍染を着たのでした。

#### (あこがれ)

藍染自体は、日本固有の染ではなく世界中で作られてきましたが、日本の代表的な藍はタデ科で、他国とは品種を異にします。この品種と日本人の感性と、気候風土は、「ジャパンブルー」と呼ばれる、独特のさわやかな青色の染を生み出したのでした。

和想館では、8月に藍染展を予定しています。お楽しみに!!

